心の病、対話で防げる

業務中の叱責注意

OCHIS副理事長
作本　貞子さん

【大阪】労働環境の悪化などにより、精神的な不調を抱える労働者が増加してきている。中でも代表的なのがうつ病。ヘルスケアネットワーク（OCHIS、武田裕理事長）の作本貞子副理事長は「心の病は日頃からコミュニケーションを取って、早めに気付くことが大切」と強調する。

「うつ病は怠け癖なのか、病気なのか判断が難しい。一度発症してしまうと、治療が長期化する上、再発率も高いことが問題」

厚生労働省によると、仕事による強いストレスなどが原因で発病した精神障害労働災害認定件数が、2012年度は475件と過去最高を記録。こうした状況を踏まえ、労働安全衛生法の一部が改正され、15年12月から従業員50人以上の事業場にストレスチェック（医師、保健師らによる検査）が義務付けられる。

「ドライバーは会社を出ると一人で仕事をすることが多く、『ストレスが無く働けるから大丈夫』と考えている経営者が少なくない。しかし、実際の（うつ病の）原因は借金や親の介護、子どもの教育の悩みなど、家庭の問題が関係しているケースがよくある」

更に、最近では「業務中の叱責（しっせき）などが原因で発症した」という若者も増加傾向にあり、「ゲームやパソコンをして過ごしているため、コミュニケーションを上手く取れない人が増え、しかられると過剰に反応してしまうのではないか」と分析する。

「うつ病と疑われる社員がいても、直接聞きにくいと思うので、ポスターなどを活用して見える化し、本人に自覚させてはどうか。『厳しくすることが愛情の裏返し』という時代もあったが、パワーハラスメント（パワハラ）やモラルハラスメント（モラハラ）も問題視されており、経営者や管理者が今の常識的な基準を勉強することも大切」

（上田理子）